

平良愛香牧師「羊飼いたちが帰ったところ」

2006年湘北地区新年合同礼拝のメッセージをきいて

ルカによる福音書2章8節以下で、何故“羊飼いたちに”天使がキリストの誕生を告げ知らせたのか、この当時、羊飼いたちは、律法も守れない、安息日も守れない「アウトサイダー」とされていた。ただ、自ら求めて「アウトサイダー」となった訳ではなく、差別を受けていた人々といえる。だから、自らも、「神さまが自分たちを覚えてくれることも、救い主が自分たちに会うこともない」と決めつけるのも理解できる。だが、神さまは、この小さくされた羊飼いたちこそ、最初に救いにあずかるべき人々とちゃんと分かっていた。だから、天使は最初にキリスト誕生を羊飼いたちに告げ知らせたのだ。

羊飼いたちは喜んだ。「神さまは私たちを愛して下さっているのだ。神さまの前に私たちは立つことができるのだ。」「卑下せず、喜んで生きることができるのだ。」そして、天使が話したキリスト誕生のニュースを人々に知らせた。羊飼いたちは変わった。『見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあげ、賛美しながら帰って行った。』(20節)どこへ？牧草を求めて“生きざるを得ない場”である荒れ野へ。考えてみれば、家畜を育てる羊飼いたちの仕事は安息日に休める訳がない。だが、羊飼いたちは「神さまがいつも伴に居るのだ。神さまは私たちに差別をされない。」と分かり生き方が変わったのだ。

平良牧師の話聴き、私たちが生きる世界、社会にも、差別される人々、貧困故に飢餓や感染症で命を削る人々、為政者の起こす戦争で傷付き、命を落とす人々、野宿せざるを得ない人々、排外主義日本で暮らす外国人労働者の人々ら、今日の“荒れ野”で生きている“羊飼いたち”のことを忘れてはならないと想った。彼らこそ、神さまに深く愛され、生きる力を得るべき人々ではないか？ 私たちはでき得る支援をすべきではないのかと考え続けた。

さて、話は戻るが、神さまをあがめるように生き方の変わった羊飼いたち。差別が強くなる時、その時々で神さまのことを忘れるかもしれない。信じることができなくなり、神さまの手をふり解こうとするかもしれない。でも、平良牧師は言いました。「神さまが羊飼いでであろうとみなさんであろうと、一度覚えたら、あなたが手をふり解こうとしても、神さまは一度握ったあなたの手を離すことはない。その上で神さまは“しっかり掴まっていなさい”と言います。だから、わたしたちは神さまの手を強く握り返すのです。」と。

私は、正直“見えない神さま”の話はこれまで苦手だった。しかし、平良牧師の話で、「神さまは、そこまで私たちが愛して下さっているのか。ふり解こうが、逃げようが、神さまの手は私たちをとらえて決して離しはしないのだ。」と想うと済まないような気持ちになった。お話の後で唄う「まきびとひつじ」について、平良牧師は、「・・・『主イエスは生まれた』の箇所は、マサオでもヒロコでも、自分の名前を入れても良いのですよ。私たちが生かしてくださるイエス・キリストが生まれた時に私たちも生まれたのです。」と話された。そして唄った。私は、「こんなに沢山の罪を犯し生きてきた私を、神さまが愛し、とらえようとしているのだ。」と今日のお話を振り返り想うと、目頭が熱くなり、途切れ途切れにしか唄えなかった。

M . I

